



を試みたいと思う。
ウエールズとの「国境」近くにあるソーンベリーの歴史はきわめて長い。十世紀には、イングランド史に登場していたという。
イングランド南部を中心に、一応の統一を果たしたアルフレッド大王の孫、アセルスタン(Aethelstan) 在位九二五―九四〇)の代にサクソン族のエイルワード(Aelfward)なる人物がソーンベリーの領主であったことが分かっている。イン

敷地内では Müller-Thurgau (ミュラー・トゥールガウ) という、ドイツ原産の白ワイン用品種が作られている。写真右。ここでのブドウの収穫量は限られているため、近くのワイン工場に持ち込まれてブレンドされ、「ソーンベリー・キャッスル」オリジナルの白ワインとなる。ボトルで18ポンド。フルーティーでさっぱりとした、やや辛口の飲みやすいワインだ。



とてころが、ヘイステイングズの間で勝利をおさめ、ノルマンディー公(ウィリアム一世 William I 在位一〇六六―一〇八七)としてイングランドに乗り込んだギヨーム二世により、ソーンベリーは没収され、王妃マチルダに与えられてしまう。一説

によれば、マチルダがまだ独身だった頃、その父親であるフランタース伯爵(フランタース地方は今のオランダ南部、ベルギー西部、フランス北部にまたがる地域)のもとを使節として訪れたブリクトリックに求婚したものの、あえなく拒絶された。マチルダはそれを根に持って夫のウィリアム一世にねだり、ソーンベリーを我が物にしたとされている。ブリクトリックはウィンチェスターで囚われの身となり、そこで生涯を閉じたといわれているが、もしこの説が真実なら、気位の高い女性ならみがかったブリクトリックは、自分の判断を獄中で悔やんだことだろう。

マチルダの死後、あるノルマン貴族がソーンベリーに封じられた。この貴族の娘がヘンリー一世(Henry I 在位一〇〇一―一〇三五)の庶子(早くいえば愛人の子)に嫁いだことから、ソーンベリーのイングランド王室との深いつながりが本格的に始まる。一三三四年には、そこへ野心家の

ランド史初の土地台帳「ドウムズデー・ブック」には、このエイルワードの孫、ブリクトリック(Briktic)の所領としてソーンベリーが登録されている。城の歴史は五百年だが、領地としての歴史はその倍、千年にもおよぶというわけだ。

スタフォード男爵の血が『乱入』。彼は、ソーンベリーを含む数々の所領を相続したマーガレットという女性を誘拐し結婚するという大胆な行動をとったのだ。さらに、一三九八年(ろにはエドワード三世 Edward III 在位一三二七―一三七七)の七男の娘がスタフォード家に興入れし、ブラントジャネット朝の縁者と見なされるようになる。

一四四四年には、ヘンリー四世(Henry IV 在位一三九一―一四一三)の寵愛を受け、スタフォード家はバッキンガム公の称号を獲得したものの、二代目バッキンガム公は、時の王リチャード三世(Richard III 在位一四八三―一四八五)への反逆軍に加わり敗北。ソールズベリーで処刑された。スタフォード家の命運もこれで尽きたかと思われたが、ヘンリー・チューダーがリチャード三世を破り、ヘンリー七世(Henry VII 在位一四八五―一五〇九)として即位。チューダー朝が始まったおかげで、スタ

10世紀中盤、アルフレッド大王の孫の代に、すでに史実に登場していたソーンベリーという所領がある。有力貴族に与えられる領地として知られるようになり、14世紀にはプランタジネット王室の血をひく女性が興入れし、16世紀にはチューダー朝の所有となった。しかし、その華麗な経歴ゆえに、権力争いに巻き込まれることも多く、領地内に建てられた城は300年近く放置されたこともある。ヘンリー8世縁の地でもあり、現在は一流ホテルとして再生を果たした、このソーンベリーの城を今号では征くことにしたい。



華麗なる一族の運命に翻弄された

ソーンベリー キャッスルを征く

●征くシリーズ●取材・執筆・写真/本誌編集部

個人ブログ 大募集!!

あなたのブログを ジャーニーのホームページに リンクしませんか?

現在、インターネット・ジャーニーへのアクセス数は月平均約11万。
あなたが発信している英国での生活に関するブログを、
今よりちょっと多くの方にご覧いただくためのお手伝いができるかもしれません。
営利を目的としない個人のブログであれば、リンクはもちろん無料です。
お申し込みはインターネット・ジャーニー「個人ブログの部屋」をご覧ください。

※掲載にあたり、事前に一定の審査をさせていただきます。内容によってはリンクをお断りしなければならない場合もございます。予めご了承ください。

インターネット・ジャーニー
www.japanjournals.com



ゲストの出迎え役はブドウの木々

ワインの本場、フランスでのみならず、英国でも今年のブドウの「でき」について、あれこれと評価が聞かれるようになった十月半ば。取材班はロンドンからM4を一路西へと車を駆っていた。目指すは、プリストルから北北東方面に十マイル余り走った小さな町にある城。名をソーンベリー・キャッスル(Hornbury Castle)という。

「実際に宿泊できる、イングランドでも数少ないチューダー朝時代の城」、「自家製ワインを楽しむことのできる城」といったうたい文句の数々にひかれ、今回、取材に向かうに至ったのだ。あいにく、ブドウの収穫は、我々が訪れた日の約一週間前に完了してしまっただけで、自家製ワインは味わえるという聞き、嬉々として取材の日を迎えた。

ロンドン市内を発つてから約二時間半。ソーンベリーの町に到着した我々は、城へと続くはずの道の入り口を探した。標識に従えば、このあたりにあるはずだが、目をこらしながら徐行していると、はたして、町の中心の役割を果たすセント・メアリー教会の敷地の一角であるかのように見える。控えめなゲートに行き当たった。そこが本当に城への入り口か自信が持てぬまま、緑に囲まれた私道をゆっくりと進んだ我々の左手に、整然と並ぶ低木の列が現れた。

ブドウ棚だ。なまり色の空の下、朝方まで降っていたと思われる雨のしずくが残るブドウの樹木には見当たらないが、葉はまだ生い茂っている。そして、そのブドウの木々に目を奪われていた我々の右手には、威容を誇る建物がそびえていた。

五百年余りにわたる時間の中で、数々の歴史的ドラマを目の当たりにしてきたソーンベリー・キャッスルが、その伝統の重みを淡々と受け止めつつ、ただ穏やかにたたずんでいるのだった。一時はイングランド王室所有となつたこともある城だが、派手に自己主張するでもなく、きわめて実直な印象を受ける。ただ、それはあくまで外観から得られる印象だ。十六世紀イングランドで、要塞をベースに、当時、流行したルネッサンス形式の壮麗さを加味した邸宅にしようとしたというから、内部にはまったく異なる世界が広がっているのかもしれない。そうした思いを頭にくらせながら、取材班は城の玄関へと歩を進めた。

ウィリアム一世の王妃の 仕返しを受けた所領

さて、実際に城の中に足を踏み入れる前に、ソーンベリーの所領とその城の歴史について、できるだけ「予習

長い歴史を秘めた空間で 最上級のくつろぎを味わう

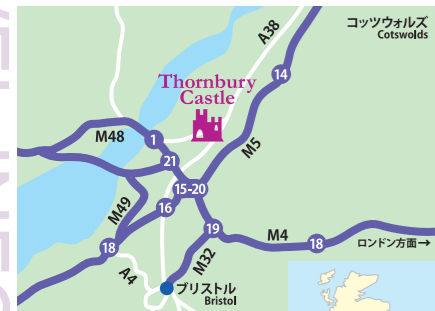
ソーンベリー・キャッスルの客室は、内装も間取りも部屋ごとに大きく異なる。また、各客室には、城にゆかりのある人物などの名前がつけられている。

トラベル・インフォメーション

2009年12月10日現在

ソーンベリー・キャッスル

Thornbury Castle
Thornbury, South Gloucs, BS35 1HH
Tel: 01454 281182
www.thornburycastle.co.uk



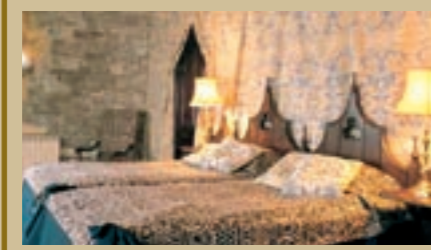
ロンドン市内から自動車で行く場合、M4のジャンクション20からM5に入り、やや南下（北上しないよう注意）、ジャンクション16で右折。その後A38に入りThornburyの表示に従って走ればOK。ロンドンから約2時間半。

1室1泊の料金(コンチネンタル式朝食込み、税・サービス料別)	
クラシック Classic	£ 190~
デラックス Deluxe	£ 290~
スイート Suite	£ 350~
スペリアー Superior	£ 550~
タワー Tower	£ 650~

Duke's Bedchamber

デュークス・ベッドチェンバー

ヘンリー8世と2番目の王妃アン・ブリン(エリザベス1世の母)が1535年に滞在したという部屋。アンはその翌年、不貞を働いた(国王への反逆罪)として処刑されてしまうが、この頃はまだ寵愛を受けていたことになる。



Portlethen

ポートレザン

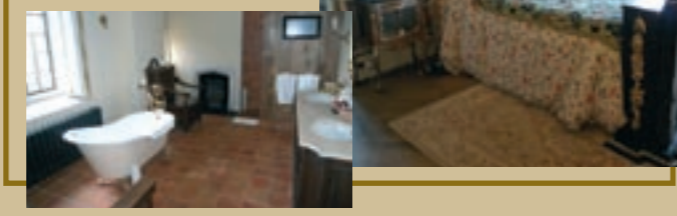
ミニ・キッチンも完備したスイート。離乳食を温めるなど、小さな子供のいる家族連れの宿泊客にも好評という。壁に「かくしベッド」がある=下写真。



The Tower ザ・タワー

ザ・タワー

英国内のホテルにあるものとしては最も幅が広いというベッドが自慢(幅10フィート=約3メートル)。もったいないほど広いバスルームも特筆もの。中でも格調高いトイレにご注目。



Bedford ベッドフォード

1990年代に改装された部屋を客室として使用。ジャスパー・チューダーの幽霊を見たスタッフもいるとのことだが、それもうなづけるほど、随所に歴史を感じさせる部屋だ。



第三代 バッキンガム公のみた 壮大な夢

三代目バッキンガム公となったエドワードは、しっかりとした「ビジョン」を持つ若者に成長する。やがてヘンリー八世(Henry VIII)在位一五〇九(四七)から、既に住居として使われていた建物をグレートアツプ、城を建てることを許可された。一五一〇年の統一を成し遂げた者と同様、天下統一を成し遂げた者が恐れるのは、家臣の誰かが突出した力をつけ、自分にはむかってくる。徳川家康が各大名に、許可なく城郭の増改築を行うことを禁じたのと同じで、ヘンリー八世も諸侯による反逆を抑えるため、目を光らせていた。そのヘンリー八世に城の建設を許可されたというのだから、三代目バッキンガム公エドワードは、よ

フォード家の復興が果たされたのだ。二代目バッキンガム公の息子、エドワードがわずか七歳で三代目バッキンガム公として、ソーンベリーを継承した。

ここまで見ただけでも、ソーンベリーの歴史は十分波乱に富んでいるが、さらに劇的できごとがソーンベリーを待ち受けていた。

広々としたチャンセラース・ラウンジではアフタヌーン・ティーを楽しむこともできる。冬には暖炉に火が入り、居心地の良さがさらにアップ。

ほど厚い信頼を得ていたのだろう。エドワードは、「要塞の役割を果たす大邸宅」をめざし、大工事に着手。その計画は当時、ハンプトンコート宮殿に告ぐ規模の大きだったという。しかし、「好事魔多し」のことわざ通り、ヘンリー八世がエドワードを重用するのを快く思わぬ者がいた。ヘンリー八世の側近、ウルズリー卿である。

彼は、エドワードを失脚させるシナリオを書き上げ、それを密かに実行に移したと見て間違いなさそうだ。確かに、エドワードが目指した「要塞の役割を果たす大邸宅」は、堅固な城郭の呈を示していた。しかも、彼はかつてイングランドを治めていたランカスターを主張することも不可能ではなかった。エドワードが反逆を目論んでいるという噂が広まり、それはヘンリー八世の耳に届く。

当時、王(女王)への反逆を目論むことは国家反逆罪であり、まず例外なく極刑が待っていた。反逆罪の名のもと、ヘンリー八世も、数えきれないほどの首をはねた。

一五二二年四月、逮捕されたエドワードは裁判にかけられる。このくだりはシェイクスピアが一六三三年に発表した史劇『ヘンリー八世』にも描かれており、それまで信頼していた家臣たちが「証人」として、自分に不利な証言を言い連ねるのを悲痛な面持ちで嘆くエドワードだったが、その悲運を覆す奇跡は起こらなかった。同年五月、彼はロンドンのタワーヒルで処刑されたのである。

一五三五年にはヘンリー八世本人と二番目の妻、アン・ブリンが十日間滞在したことが記録に残っている。ヘンリー八世夫妻が逗留した際には、近隣の自治都市プリストルから丸々と太ったウシ十頭とヒツジ四十四匹が贈られ、饗宴に用いられたという。ヘンリー八世の死後、即位したエドワード六世(Edward VI)在位一五四七(五三)は、処刑されたバッキンガム公エドワードに同情的だったようだ。その息子をスタフォード男爵として取り立て、ソーンベリーも一五五四年にスタフォード家の手に戻された。しかし、一五四七年にはソーンベリー・キャッスルはすでに大規模な修復作業が必要となっていた。この時の工費は王室が負担したもので、それ以降も定期的な修理と維持管理が必要とされた。ところが約三百年、相続人の誰一人として、城に十分な修復をほどこすだけの情熱、あるいは財力を持たず、屋根の一部が崩れるなど、ソーンベリー・キャッスルはかつての栄光を失いかけるようになっていた。



救世主がようやく現れたのは、十九世紀半ばのこと。一八二四年にソーンベリーを相続したヘンリー・ハワード(Henry Howard)という人物が、五

手前で見えるのが、城内で最も高い「タワー」で、レフション新めは、上に登らせてもらえる(ただし、足元にはくれぐれも注意を、晴れた日にはウェールズを望むことができる)。

〇年代に本格的な修復工事をスタートさせたのだ。屋根も再建され、人が快適に暮らすことのできる邸宅として、城は息を吹き返したのである。それから約五十年を経た、西暦二〇〇〇年、一流ホテルが加盟するグループ、「ヴォン・エッセン・コレクション」von Eszen Collection)が、ソーンベリー・キャッスルを購入。チューダー朝の城がホテルとして生まれ変わることになったのだ。城に心があるとなれば、このできごとは晴天の霹靂であり、強いショックをもたらしたと推測できるが、マイナス面ばかりではなかった。城のオリジナルティをいかにしながら、大規模かつ包括的な改装工事が行われた結果、ソーンベリー・キャッスルは再び壮麗な建造物としてよみがえったのだ。

実際に、複数の客室を案内された際に感じたのは、チューダー朝の城の内部にある部屋としての「違和感」のなさだった。どの部屋も重厚にしてエレガントに仕上げられており、近年、手が加えられたと思えないほど、歴史を感じさせる部屋も少なくない。これなら許してもらえらるだろうという気がした。

ソーンベリー・キャッスルの文字がラベルに刻まれた白ワインとともに、レストランでの昼食を終えた取にチャンセラース・ラウンジへと移動した。

窓の外に広がる鉛色の空が、心なしかやや明るくなってきたように感じられる。柔らかなソファに深々と腰をしずめ、くつろいでいると、小鳥の澄んだ鳴き声が聞こえてきた。その小鳥のさえずり以外、何の物音もしない。まさに、贅沢な静寂というべきか。この静けさは、千年前も今も変わらぬものに違いない。そして、時はうつろい、時代も確実に変わっていくが、ソーンベリー・キャッスルは今までそうしてきたように、これからも、その静寂の中、歴史があるがままに受け入れていくのだろう。

一五三五年にはヘンリー八世本人と二番目の妻、アン・ブリンが十日間滞在したことが記録に残っている。ヘンリー八世夫妻が逗留した際には、近隣の自治都市プリストルから丸々と太ったウシ十頭とヒツジ四十四匹が贈られ、饗宴に用いられたという。ヘンリー八世の死後、即位したエドワード六世(Edward VI)在位一五四七(五三)は、処刑されたバッキンガム公エドワードに同情的だったようだ。その息子をスタフォード男爵として取り立て、ソーンベリーも一五五四年にスタフォード家の手に戻された。しかし、一五四七年にはソーンベリー・キャッスルはすでに大規模な修復作業が必要となっていた。この時の工費は王室が負担したもので、それ以降も定期的な修理と維持管理が必要とされた。ところが約三百年、相続人の誰一人として、城に十分な修復をほどこすだけの情熱、あるいは財力を持たず、屋根の一部が崩れるなど、ソーンベリー・キャッスルはかつての栄光を失いかけるようになっていた。

〇年代に本格的な修復工事をスタートさせたのだ。屋根も再建され、人が快適に暮らすことのできる邸宅として、城は息を吹き返したのである。それから約五十年を経た、西暦二〇〇〇年、一流ホテルが加盟するグループ、「ヴォン・エッセン・コレクション」von Eszen Collection)が、ソーンベリー・キャッスルを購入。チューダー朝の城がホテルとして生まれ変わることになったのだ。城に心があるとなれば、このできごとは晴天の霹靂であり、強いショックをもたらしたと推測できるが、マイナス面ばかりではなかった。城のオリジナルティをいかにしながら、大規模かつ包括的な改装工事が行われた結果、ソーンベリー・キャッスルは再び壮麗な建造物としてよみがえったのだ。

自家製ワインとともに 正統派英国料理を楽しむ

ソーンベリー・キャッスルには「タワー・ダイニング・ルーム(Tower Dining Room)」と「バロンス・ダイニング・ルーム(Baron's Dining Room)」のふたつのダイニング・エリアがある。後者のほうがよりプライベートな趣き。どちらも3コース/25ポンド、2コース/19.50ポンドのセットメニューが用意されている。

Chicken Liver Parfait

鶏レバー・パルフェ

「パルフェ」は「パテ」よりも軽やかな食感が特徴。レバー独特のくさみもなく、スターターとしてほどよい量に仕上げられていた。

Whipped Goat's Cheese

ヤギのチーズのホイップ

ほのかな酸味を呈するヤギのチーズの塩気と、添えられたビートルートのピューレの上品な甘さが好相性。見た目も華やか。

Pan-fried Bream

白身のブリーム(タイの一種)

ニューポテトやシャロットなどの野菜をベースに置き、タイの仲間であるブリームを美しく盛り付けた一品。ブリームの皮にもう少し焼き目がついていても良かった。

Or Cheek

ウシのほほ肉の煮込み

ほうれん草、バター控え目のマッシュポテトが添えられた、定番の煮込み料理。やわらかなほほ肉を、甘さをおさえたソースをからめて食す。

Chocolate Mousse

チョコレート・ムース

ストロベリーをあしらった、なめらかな口あたりのムース。スターターとメインですぐに満腹に近かったが、チョコのほろ苦さのおかげで完成。

Treacle Tart

トリクル・タルト

トリクル(糖蜜)を使ったタルトは英国ではおなじみのデザート。日本人には甘みがかなり強いが、やみつきになる人もいる、どこか懐かしい味。

ジャーニーのクラシファイド・アドなら お申込みからお支払いまで オンラインでラクラク

掲載料はその場で自動計算

通常締切に間に合わなかった方のために、
Express, Super Express (追加料金がかかります)もご用意しています。
詳細・お申込みはこちらをご覧ください。

www.japanjournals.com

ご利用頂けるカード
Switch / Maestro / Solo / Delta / Master
Visa / JCB / American Express

Japan Journals Ltd
Journey Classified Dept.